



スパイの内幕
かんべむさし
実業之日本社
(6/25刊・¥750)

短編十二編が収録されている。

スパイのホンネとタテマエを描く表題作をはじめ、突然死んでしまった主人公の家で、個人的な秘密が次々に暴かれる「死恥」、町内の自警団が、サディステイックな暴力集団と化す「町内警察」、文字どおり人生の縮図が模倣化された「ミニチュアの街」、全く眠る必要のなくなった男「そろそろ交替」など、比較的古いもの（二三年前）を中心に構成されている。そのうち三分の二が『週刊小説』掲載、残りも中間小説誌発表作である。結果的に、本作品集の性格も、一般読者を対象にしたものといえるだろう。

例えば、「そろそろ交替」などは、書きよによって、シエクリイ風の短編になったはずである。しかし、そのためには、結末のムードを初めから用意する必要がある。これは、一般読者が理解する場合、難しすぎるかもしれない。今でも、純粹のSF的設定が、一般化したとは、必ずしもいえないからだ。

そういう意味から、本短編集は、むしろ、SF入門、かんべむさし入門の書として推薦できる。中では、被害妄想の現実化した「死恥」「町内警察」が、印象に残った。（俊）